

新世紀の幕開けの中で

平成13年度会長

会長当時・北海道札幌東陵高等学校長

久富和栄

私が北海道高等学校英語教育研究会の会長を引き継いだのは、まさに新世紀幕開けの年2001年で、何かと夢ふくらむ年でもありました。それから長い時間が過ぎ、当時の記憶も薄らぐ昨今ですが、少しく心許ない記憶の糸を辿ってみたいと思います。

当時、高等学校英語教育に関わる事業には、高等学校英語教育研究大会、英語弁論大会、LL研究大会、中・高英語研究大会の4つがあり、事業行別に担当事務局のローテーションを決めていました。しかし、高等学校英語教育に関わる組織自体には未だ未分化な部分があったり、また、それぞれの学校育事情にも大きな落差があったり、さらには、事務局担当予定校への校長配置も希望通りには進まないこともあって、事務局運営もその時その時の状況に応じて臨機応変に進められていました。

折しも、高英研の事務局はローテーションに従い北広島高等学校から厚別高等学校へ移る年でした。私は既に東陵高校での勤務2年目を迎えていましたが、それまでの経緯もあり、高英研の会長を引き受けることになりました。本来ですと、会長の所属する学校に事務局が置かれるのが望ましいのですが、先述の通り、諸般の事情がありこの年は不自然な形で事務局の運営を進めることになりました。幸いに、事務局担当の厚別高校では、着任早々の校長さんはじめ英語科の先生方も事情をよく理解され、快く引き受けてくれました。改めて、当時の関係者に感謝申し上げたいと思います。

しかし、仕事を始めてみると、会長の学校と事務局が異なるというのは何かと不便なものでしたが、その負荷を埋めて余りある仕事をしてくれたのが、その時の事務局長稲毛知子氏でした。彼女は事あるごとに、本務を終えた後の疲れも厭わず、私の学校まで出向いてくれました。彼女の英語教育に対する情熱と見識に敬意を払うとともに、この間組織の運営が順調に進められたのも彼女のお陰と心より感謝しています。

会長就任早々、私と稲毛事務局長が手がけた課題は、翌年1月実施の教育研究集会の準備と高等学校英語関係組織の整理・再編に向けての作業でした。研究集会の準備では、21世紀の幕開けに相応しい研究集会のあり方を模索すること、と同時にその旗印ともなるべき新たな研究会テーマを設定することでした。「21世紀は人と人をつなぐ広義のコミュニケーションが重視されねばならない、英語は日本と世界をつなぐコミュニケーションの道具として捉えられねばならない、生徒達は夢と充実感をもって英語を学べるようにならなければならない時代」という認識のもと、「21世紀に生きる地球市民を育む英語教育～実践的コミュニケーション能力の育成を目指して～」をテーマに設定しました。

また、研究会の分科会設定でも、今日の英語教育が担う様々な領域を焦点化し、それぞれの領域から多くの参加者を得るべくその数を増やしました。さらには、学校現場での日常活動に役立つ具体的な指導技術も得たいということもあり、基調講演の講師である明海大学教授山岸勝栄先生にはそれまでの講義スタイルを変え、ワークショップを加えることをお願いしました。そのせいもあってか、ひと味違う立体的構成の研究会を開催することが出来たと思います。当日、新テーマの横断幕が誇らしげに掲げられているのを見た時の感動は今でも忘れられません。新しい試みには様々な困難が伴いましたが、英語教育に情熱を抱く多くの関係者の協力により、研究会が盛会裡に終始したことも付記しておきたいと思います。

また、組織の整理・再編についても、21世紀の英語教育を支えるに相応しい組織像について、いささかなりとも心を砕いたものでした。それは、個々の組織が単独で自己完結的に研究会を行う従来型の組織構成ではなく、日本の英語教育を担う各種教育現場とそれらを支援する各種関係組織とが連動され、かつ、それらの関連が俯瞰できる組織作りということでした。つまり、幼、小、中、高、大学の教育現場を連動させ、全国規模の組織と

地方規模の組織を連動させる組織の整理・編成でした。道内の組織もその観点から整理・再編され、高等学校組織をその中核に据え、英語教育全体を常に俯瞰出来るような研究会が開けるようにしたいものだ、稲毛事務局長と頭をひねったことを覚えています。新世紀の幕開けという甘美な妖気に誘われてか、夢は果てしなく広がり、つい時間の経つのも忘れて議論したことが楽しく思い出されます。しかし、残念ながら、自らの力不足と退職までの1年では時間が不十分であったこともあり、心に温めた幾つかの改革案も日の目を見るには至りませんでした。

私が引き受けた1年間は、先に述べたとおり、英語関係の組織においてもまだ未整理な部分があり、また新たな課題を抱えた時期でもあり、一つ事の解決では基本的な問題の解決には至らなかったでしょう。しかし、そのこともあってか、稲毛事務局長と一緒に好きなことをさせてもらったという実感もあり、個人的には夢の多い楽しい1年でした。

最後に、私の1年間を支えてくれた多くの関係者に改めて感謝申し上げたいと思います。特に、事務局をあずかっていたいただいた厚別高等学校には、当時の校長先生始め関係者一同に心から感謝申し上げます。また、多くの困難の中で、苦勞を厭わず献身的に事務局運営に当たってくれた稲毛知子事務局長には、その努力に改めて心からの敬意と感謝を表したいと思います。

時の移ろいは早いもの、その後7年の年月が過ぎようとしています。その時その時、多くの人の苦勞を紡いで今日を迎えた北海道高等学校英語教育研究会がここに節目を迎えて、またひとつ新たな世界を開かれますことをご祈念申し上げます。